
不思議の国のはじめ君（SSLアリスパロ）

彩月絢芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の国のはじめ君（SSLアリスパロ）

【Nコード】

N1324Y

【作者名】

彩月絢芽

【あらすじ】

ご存知『不思議の国のアリス』を薄桜鬼で。たぶんこの話を語っているのは沖田さんです。斎藤さんがヒロインです。

いろんな人に言い寄られる・・・かもしれません。

いろんなもののイメージが壊れると思うので、

『アリス』や『薄桜鬼』の原作が好きな方はご覧にならない方がいいと思います。

プロローグ

「総司！おい、総司どこにいるんだ」

ここは薄桜学園。

風紀委員長・斎藤一は、昼休みを利用して問題児・沖田総司を探していた。

今日という今日は、総司に放課後残って反省文を書かせる話をつけようと土方先生と決定している。

だが、今朝もまた遅刻してからは全く校内で姿を見かけない。脱走したかと思ったが、まだ鞆が教室に残されている。

そこで思いついたのは、学園の裏の林だった。

一応、学園の敷地内にそれはあり、元々は大学を建設するための用地だと聞いている。

しかし昨今の大学統廃合などなかなか大学新設が軌道に乗ることは難しく、工事が手つかずになっているのだと情報通の山崎君に聞いたことがある。余りに広大なため、一般の生徒たちには立ち入り禁止区域となっている。

だがやはりあそこなら、一目につかずサボれるというものだ。

林に入って行くと、昼間でも薄暗くなっていく。奥に行っているのだろうか。

ガサガサ、と茂みから何か飛び出して来た。

「うわっ?!」

「大変です。これでは遅刻してしまう」

白衣のポケットから懐中時計を取り出したのは、校医の山南だった。

しかし、何故こんなところにいるのか。そして、それよりも一
目を引いたのは・・・。

「山南先生、何なのですか、そのウサギの耳は・・・」

なんと、山南の頭には、白いウサギの耳が生えていたのだ。
それだけではない。山南の髪も白く、瞳が赤く光っている。

「ククク・・・参りましたね。どう言い訳をしたものか・・・沖田
くんもまだ見つからないし」

「えっ、総司が・・・？」

山南には、一の声が聴こえていなかったらしい。慌てて林の奥に
駆け込んで、いや跳ねるように行ってしまった。

「あっ、山南先生、待ってくれ！総司を探すなら俺も一緒に！」

山南を追って一も林の奥に急いだ。

ところが。

木の根につまづいて倒れた一の目に、飛び込んで来たのは口を開けた暗闇。

巨大な穴に一は飲み込まれてしまった――。

（続く？）

プロローグ（後書き）

アリスを一さんでやってみたら・・・？という妄想より生まれました。

薄桜鬼でアリスは皆さんいろいろと創作されている方がいらっしやるので

配役かぶったらすみません。

とりあえず

アリス・・・斎藤一

白ウサギ・・・山南敬助（羅刹W）

と、あとハートの女王とチェシャ猫とお茶会のメンバーだけ決まっています。

話が脱線したり、『鏡の国』の話がまざったりしていきそうなのですが、

思いついたら書いていこうと思います。

1 羅刹の穴へ落ちて

それはとても深い穴だった。

一は咄嗟に木の根につかまろうとしたが、その根もどんどん下に剥がれ落ちて行く。

「一体どこまで伸びてるんだ？」

地学の授業で、地球の中心核は灼熱のマグマだと聞いた。

もしかするともしかしてだが、そこまで行き着いてしまうのではないだろうか？

だとしたら、一瞬で一の命は終わってしまうに違いない。

しかし、それにしてもどんどん落ちて行くがいつこうに息苦しくもなく、むしろ宙を浮かんでいるような不思議な気分になる。

そして、下のずっと先からは光が漏れている。

「死ぬ時には人生が走馬灯のように巡るというが、そんなこともないしな・・・」

むしろ、なんだか時間を遡っているような気さえする。

すると手に何か当たる物を感じて、一はそれをつかんだ。先ほど山南先生が手にしていた懐中時計だ。

「・・・・・・！」

時計はものすごい勢いで逆回転していた。

「なんだこれは・・・」

光がだんだん強くなってきて、眩しさに一は思わず目を瞑った。

すると、急に水の中に入ってしまったようだ。一は必死で水面に泳ぎ上がった。

頭を出すと、そこは見知らぬ海岸だった。

1 羅刹の穴へ落ちて（後書き）

あー、ドードーを誰にするとか考えてなかったや・・・。
源さんのSSLでの設定を知らなかったのですが、一応公式通りに
直しておきました＞＜

2 誰かの涙のプールと長い話

なんとか岸まで泳ぎ着いた。

おそらく山南先生もこの岸に着いたと考えるのが自然だが、それらしき足跡も見当たらない。

「見失ったか・・・」

濡れた重い服にのしかかれるように、一は途方に暮れた。
すると突然、

「ハジメ君じゃん、どうしたのこんなところで？」

振り返るとそこに居たのは、一年後輩の幼馴染、藤堂平助だった。

「平助・・・お前もあの穴に落ちたのか？」

しかし・・・どうも様子が変わる。制服ではなく、鮮やかな青のギザギザ模様のついた羽織を着ている。

（これは・・・何時か何処かで見たことがあるような・・・）

だが一にそれを思い出すことはできなかった。
平助の姿が異様だったのはそれだけではない。背中と頭のとっぺんに羽根まで生えているのだ。

「穴？違うよ、その池にはまっちゃまったの」

平助が指差した海だと思っていたものは、いつの間にか池に変わっていた。しかもすぐ側に広大な屋敷がある。そして堀に囲まれた屋敷からは剣道のようなかけ声が聴こえてくる。

「ここは・・・何処だ？」

「やだなーハジメ君、俺たちの屯所に決まってるじゃん。

この羽織濡らした事、女王様に知られたらただじゃ済まないから、ちょっとシマバラの森に行って乾かそうぜ。

サノさんやシンパっつぁんもそこで茶会やるって言ってたし」

「屯所？女王様？茶会？」

ここで、一はようやく自分が夢を見ているのだと思い至った。そうでなければ、よく知っている者が知らない格好をしているわけがないのだ。

「早く、ぼやぼやしてないで。見つかるとマズいよ」

平助に引っ張られるようにして一は塀の外へ出た。

「平助、どうやら俺は記憶を無くしてるようだ」

「あー、そうなの？でも俺の名前覚えてるじゃん」

「・・・名前と顔ぐらいしか思い出せんのだ。藤堂平助、だろう」

「うーん、ちょっと違うな。ヘースケ・トードーだよ」

「余り変わり映えしないような気もするが」

「そっかな？俺たちはシンセングミって国の兵士だよ。

それで、俺もハジメくんもその騎士^{ナイト}なんだ。

といってもハジメくんは銀のナイトで、オレはまだ馬のナイトだ
けど」

平助、いやヘースケは疑いもせずかなり丁寧に説明してくれる。
この単純さが救いだっただ。

「他に何か思い出せることってないの？」

「そうだな・・・そういえば、俺は確か総司を探してたはずだ」

げっ、とヘースケが呟く。

「ソージってあの厄介な猫のソージだろ？今そのことで女王ムッチヤクチャ怒ってるもんなあ」

「総司は何をしでかしたのだった？」

「女王様の句集を盗んだ罪がかかってるんだよ。」

それでハジメくんと同じ銀のナイトの称号も剥奪されて。今サンナーンさんが指名手配してる」

「何だって?!クシュウ、とは何だ」

「詳しくはサノさんたちに訊いてよ。あつ、着いたぜ」

ヘースケが導いてくれたのは、先ほどまで一が歩き回っていた学園の林のようなところだった。

中へ入って行くと、急に目の前が開けて、豪華な朱塗りの門が現れた。門をくぐれば、瓦屋根葺きの家々に挟まれた通りの真ん中に、赤い毛氈が敷かれ、席に着いていた人物を見て一は息を飲んだ。

2 誰かの涙のプールと長い話（後書き）

ドードー↓トードー

発想が貧困ですみません・・・。

3 シマバラの《お茶会》

座っていたのは、まるで近世の花魁と思しき美しい女性。その傍にはヘースケと同じような羽織に身を包んだ薄桜学園の教師である原田左之助と永倉新八がいた。そしてそこに設えてあったのは、茶会というよりどう見ても宴会の席。

（もしかして、俺は江戸時代にでも迷い込んでしまったのか・・・？）

だが・・・、原田先生は頭の上にシルクハット、永倉先生にはうさぎの耳が生えている・・・。一は頭痛が始めていた。

「おー、遅かったじゃねえかヘースケ。お、ハジメも連れて来たのか」

「おまえがこんなところに来るなんて珍しいな、ハジメ。女王様に告げ口するなよ？」

「わりーわりー、ちょっと池にハマっちゃまってさ。それより大変なんだ、ハジメくんが記憶喪失になっちゃって」

「な、なんだって?!」

「どういことだ、ま、とりあえずこっち来て座れよ」

永倉先生は怪訝な顔をし、原田先生が手招きをした。

「どーした、ハジメくん？」

原田先生たちの所へ行こうとしたヘースケが突っ立ったままの
に声をかけた。

「ははは、キミギク公爵夫人の美しさに見とれてたんだろ」

永倉先生が豪快に笑った。

「いやですわ、シンパチウサギさん。おからかいになっては」

公爵夫人と呼ばれた花魁のような女性が婉然と微笑む。どうやら
それがこの世界での彼の呼び名らしい。

「まあ、ヘースケも、ハジメも、飲め飲め」

原田先生、いや確かサノと呼ばれたシルクハットの男が杯を勧め
てくる。

「は、原田先生、俺はまだ未成年です！」

一は驚いて断った。

「またまたハジメくん、何言ってるの。シンセングミで一二を争
う酒豪が」

ヘースケは困ったように笑っていた。

（お、俺はこの世界ではもう大人なのか・・・？）

「《茶会》ってことにしないと昼間っから飲めないしな」

サノが肩を竦めて見せた。

「まーこういうカンジなんで、説明してやってよ、サノさん、シンパチさん」

そういえばさっきからヘースケは2人に対して敬語を使っていない。ここはやはり夢なのだな・・・。

（夢ということならば、酒を飲んでも問題はない・・・のだろうか）
少し悶々としている一を見て、キミギクが手を叩いた。

「お茶とお菓子を持って来ておくれ」

ほどなくして黄色い着物姿の少女が向かいの家から出て来た。何処かで見たことがある。

近所の島原女子校の、姫野千とかいう名前だったはずだ。お嬢様で薄桜学園内でもファンがいるなど有名なのだ。

「もう、人使いが荒いんだから」とぼそぼそ云いながら千はお盆を運んで来た。

「これなら良うございましょう？」

微笑む公爵夫人に一はお礼を言った。

「ヘースケも本来なら未成年だ。おまえも茶にしろ」

「ええ、冗談キツイぜハジメくん。オレはこの一杯のために屯所

勤めしてるようなもんなのに」

千の点ててくれた抹茶を口にすると、こっくりとした甘みと苦みがムースのように舌に流れ込んだ。

「美味しい・・・」

「え、ありがとう」

千は嬉しそうに頬を染めた。そういえば、あの姫野千も茶道部だったような気がする。

「で、記憶喪失ってのはどういうことなんだ？」

シンパチウサギが訊いてきた。

3 シマバラの《お茶会》（後書き）

お千ちゃんと君菊さんの立場が逆転・・・。

衣装的にこっちの方がいいのかなーと思ってしまつて。

平助をドードーにしたけど、お茶会のトリオは本当はそのままにしたかったですねー＞＜

しかし、この世界での左之さんはちょっと意地悪です；
可愛さ余ってなんとやら、なのかしらん。

4 サンナーン、ヤマザキを送り込む

「オレたちの名前と顔以外覚えてないらしいんだ。それと、ソージの指名手配の理由も覚えてないって」

ヘースケが簡単に説明してくれた。

「そりゃあ、ハジメはソージと仲良かったもんな、忘れたふりしてかばおうって肚じゃないのか？」

杯を手にしたサノが少し意地悪く言う。

「違う！俺は、土方先生に言われて総司を探しているんだ・・・」

一は反論した。

「うん、それは間違いないぜ。ソージはヒジカタ女王の句集を盗んだんだからな」

シンパチがそう言って、酒の肴をつまんだ。

「そのクシュウとは・・・土方先生が女王？」

「女王が屯所で開かれる今度の俳句大会に使うんだそうだ。たくさん俳句が載ってる」

そういえば土方先生も俳句が趣味だと聞いたことがあった。

屯所が先ほどの池のあった大きな屋敷のことで、そこに女王ヒジカタやコンドー王、サノやヘースケもみんな住んでいるのだとシン

パチは教えてくれた。

「まー、とりあえず女王に逆らうことさえしなきゃ、シンセングミでは問題ないはずだ。ハジメは特に、女王の信頼も厚かったしな」

「信頼、っていうより、ハジメは女王様の信奉者みたいなもんだろ」

サノが茶々を入れた。

「確かに、オレたちみたいに仕事さぼるなんてことは、記憶喪失でもなきゃしてないよなー」

ヘースケが愉快そうに笑う。

そう言われて一は、やはり本来の仕事に戻るべきなのでは、という気持ちになってきた。

「ただ、気をつけないといけないのは、金のナイト、白ウサギのサンナーンさんだな・・・」

サノがそう呟くがはいか、朱塗りの門の向こうから人影がたちの前に現れた。

「や、山崎・・・！」

黒尽くめの忍装束を着た山崎が、大きな封筒を持って現れた。しかし、この山崎の格好は忍者っぽいだけではなく、大きなトカゲのしっぽをつけていた。

（山崎、薄桜学園きっての常識人であるお前もか・・・！）

「シンセングミ香かおりのナイト、ススムヤマザキです。
キミギク公爵夫人へヒジカタ女王陛下より招待状を持って参りました」

「あら、ありがとう。早速出かける準備をしなくては。皆様、ご機嫌よろしゅう」

キミギクは手を叩いて立ち上がると、千に連れられて家の前に入って行った。

「や、ヤマザキ君。勘違いしないでくれよ。これは《茶会》なのであって・・・」

「心得ております。女王は句集が戻って俳句大会の準備に余念がありません。」

報告すると余計な手間がかかってしまいます」

「ありがてえ。流石、話がわかるぜ」

しどろもどろなシンパチたちに、ヤマザキはさらりと言った。

「句集が戻った、ってことはもうオレたちはソージを探さなくていいわけか？」

「それはまた別の話です。ただ、今は俳句大会のため、保留になっているだけかと。」

みなさんも早急に屯所にお戻りください」

「えー？オレなんかまださっき来たばかりだって言うのに・・・」

ヘースケが不満を漏らす。しかし、一もそろそろ屯所に戻るべきなのだろうと考えていた。

「ま、またそのうちやればいいんだよ《茶会》なんだから」

サノが飄々と言った。

「けど、ハジメ、隊服はどうすんだ？ お前、それも忘れたのか？」

シンパチが訊いてきた。どうやら隊服というのは、この揃いの羽織のことらしい。

「隊服無くしたってなると、また女王がオカンムリだぜ」

「だよねー。ヤマザキ君、余ってる隊服ない？」

「一体どうしたんですか」

そこで一はヤマザキに、記憶がないのだという説明をした。

「そうですか……。一応部屋にストックがあります。オレについて来てください」

そこで一は屯所に帰ると、ヘースケたちと別れてヤマザキについて行くことになった。

4 サンナーン、ヤマザキを送り込む (後書き)

タイトルが原作と順番変わってしまった・・・。

でも概ねキャラの配役が決まったので満足です。
勢いで今週中に終わったりしてw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1324y/>

不思議の国のはじめ君（SSLアリスパロ）

2011年11月5日06時20分発行